

リセの初等科における語学教育（日本語および英語の授業） - AF-Fcpe の考え方

保護者にとってリセにおける語学教育 - とりわけ日本語教育 - は、以前から非常に興味のある課題です。AF-Fcpe は創設当時から、この課題に関する議論に熱心に参加してきました。また、先日初等科の校長先生に宛てられた JLM の保護者の要望書は、日本語の学習に関する問題意識が依然として高く、リセが保護者の期待に応え切れていないことを示しました。

こう言った状況の中、近く開かれる「初等科における語学教育に関する委員会」において、語学教育 - とりわけ初等科における日本語教育 - に関する AF-Fcpe の要望を再度きちんと学校に伝えたいと思います。

今後の話し合いに皆さまのご意見・ご希望を反映させるためにも、以下の提案をお読み頂きご感想をお聞かせ下さい。

初等科 JLE (Japonais Langue Étrangère=外国語として学ぶ日本語)

毎年同じ内容の学習（自己紹介、等など）を繰り返しているとの印象が、リセで日本語教育が始まって以来、保護者と生徒の間に根強くあるようです。この場合生徒のやる気が低下していることは事実です。その一方、このカリキュラムを経た子供たちは、簡単なシチュエーションならある程度日本語でコミュニケーションを図ることが出来ると思われます。現在市販の様々な日本語の教材は、コミュニケーションと行動目標に即したシラバスのものが多いため、その点リセのカリキュラムに合っているように思われます（今年販売された「できる日本語」を参考）。

- 初等科終了時に（ヨーロッパ共通の語学認定システムの）A1 レベルに達するという目標を前提に、よりの確に保護者と生徒の要望に応えるため、日本語能力試験（N5 レベル）のような認定システムを利用することを提案します。（日本語能力試験は国際的に認められており、日本語のコミュニケーション力の全ての面を網羅したものです。）JLE のカリキュラムを数年間（例えば3、4年）経た生徒を対象に任意で受験を勧めるやり方などが考えられます。
- 可能な限り、レベル毎にカリキュラムをよりハッキリと識別する必要性を感じます。それぞれの生徒が自分に適したレベルの学習を経て、より高い充実感が得られることが求められているからです。
- その点、子供たちのモチベーションを上げるため、リセ独自の「出来たことチェックリスト」の導入を提案します。（これは毎年連続して使用するもので、生徒自身が - 先生の協力を得て - リストに掲載されている「出来たこと」（能力）項目をチェック

して行く仕組みにします。また日常生活のどのような場面で実際それが「出来た」のかを、子供が具体的に日記の形式でフランス語で記載出来るような形のものにします。)

- 保護者と教師間の更なる情報交換の必要性を感じています。リセのホームページに学習目標が最近再び掲載されたことを嬉しく思います。しかし保護者の観点から、子供の学習を理解しそれを支えて行くためにも、学習の進め方について更なる説明が必要であるように感じます。
- 同年代の日本人の子供との交流の場（スポーツ、文化等）を増やすことを願います。

初等科 JLM（Japonais Langue Maternelle=日本語を母語とする子供向の日本語）

先日の学校管理評議会の際に学校側が提示した数字によりますと、今、日仏家庭の割合が非常に高くなっています。また（日本以外の国籍で）日本に定住している家庭の数も相当のもので、それらの家庭の子供達の大半は日本語が母国語のように話せます。これら二つのカテゴリーに属する家庭がリセの最も安定した「客層」であることを踏まえ、フランスの文部科学省の管轄下にある在外フランス人学校として、受け入れ国である日本の言語としての日本語の学習は、最も重要な課題と言えます。

- まず、前述の学校管理評議会で葬り去られてしまったようですが、日仏バイリンガルセクションの開設は私たちが切望しているプロジェクトであることは確かです。現在初等科で JLM の促進のために努力が重ねられていることを嬉しく思います。しかし東京のリセとして更なる可能性が存在するのではないのでしょうか。
- バイリンガルセクションが存在しない今、様々なやり方が考えられます。以下の提案は互いに補い合うものであり、一つを選択したからと言って他のものが除外されるものではありません。
 - より個人の希望に沿ったカリキュラムを提供する：例えば英語より日本語を優先したい家庭に対して、英語の時間数を減らし日本語の時間数を増やすなど。
 - 日本語の時間数を増やす。日本語の授業が漢字の詰め込みに終始せず、バランスの取れた日本語の学習（読み・話し方・作文）が出来るよう、語学教師に与えられた時間数を増やすことが必要不可欠だと思われる。
 - 語学以外の科目を日本語で教えることを検討する：例えば歴史や地理を日本語で教える、など。日仏バイリンガルセクションが開設されないにしても、JLM の場合、日本語を語学として学ぶだけではなく、学習の手段として実際に使うことが必要であるように感じる。
 - 秋休み前に始まった取り組みを継続する：近所の図書館に子供と出向き日本語の本を借りるよう促す。

- リセにおける日本語教育を、マテルネルから中高等科まで一貫したものとして認識する必要があります。そのためリセ全体の日本語教育を統括するコーディネーターの任命が必要不可欠に思われます。このコーディネーターは日本語の学習を熟知するプロであり、初等科と中高等科間の連携を取れる方でなければなりません。また、初等科に限って言いますと、日本語教師の中からお一人が正式に日本語教師コーディネーターとして任命されることを願います。そのコーディネーターは各教師の自由を尊重しつつ、教師間の学習方法の調和を図ります。
- JLE と同様、保護者とのコミュニケーション体勢の強化を図って欲しいと思います。特に学年初めに 学習目標・家での宿題・教師からの要望などを、フランス語と日本語で明確に示してもらう必要があります。日本語ノートに保護者のサインが求められていることを周知させるなど、更なる連絡と説明が必要です。また学校での学習に併用または補足して、家庭学習に使用する教材（ドリル、練習問題集など）を学校が指定する必要があります。

初等科 英語教育

- 日本語と同様、保護者と教師間の情報交換と連絡の頻度を更に増やして欲しいと思います。また子供の学習の進み方をより具体的に把握出来るよう、英語ノートが存在する場合はノートをより頻繁に家に持ち帰れるようにして欲しいです。
- 通信簿に語学教師のコメントが掲載されないことも見受けられるため、その点を徹底して欲しいと思います。
- 子供が英語の図書に触れ合える機会を作って欲しい。また、ブリティッシュスクールなどの子供達との交流も考えられるのではないのでしょうか。